

# Argentina

アルヘンティーナ

No. 48



© 星野 美智子

社団法人 日本アルゼンチン協会 会報

2006年7月

最初からアルゼンチンが好きなんです

～土屋義彦さんとアルゼンチン～ ..... 1

アルゼンチン日系団体が困窮同胞救援へ ..... 3

日亜関係拡大・強化に向けて

～アルゼンチンへの企業進出体験～ ..... 3

アルゼンチン代表 W杯出場

～無関心を装うアルヘンティーノス、その心は～ .... 5

日亜関係拡大・強化に向けての新たな戦略 ..... 7

親子二代のタンゴの作詞 ..... 8

回復続くアルゼンチン経済 ..... 9

ロック・ナショナルという音楽 ..... 10

日亜貿易の先駆者、瀧波文平 ..... 12

Resumen en castellano ..... 13

第50回総会・懇親会報告 ..... 15

## 最初からアルゼンチンが好きなんです

～土屋義彦さんとアルゼンチン～

きき手 河崎 勳

81歳と言われて驚く。血色はよく肌は若々しい。背筋を伸ばして早足でさっさと歩く。

一新幹線の旅で、朝の埼玉から昼の大阪まで3食召し上がったそうですね。

「いやあ。。。はっはは。まあ食べることと眠ることですね。食べ物では肉が好きですね。」

アルゼンチンの日本人移住者が自分たちの手で移住史作りや身寄りのない高齢移住者保護の事業を立ち上げる



と聞いて募金に尽力した。\*

「日本財団、トヨタ財団や大阪の万博記念機構などにお願ひしましたら協力してくれました。私の今の仕事は『世のため人のため』です。」

お礼のため新幹線に乗って大阪の万博記念機構を訪れたときは「これだけのために大阪まで来て頂くとは。こんなことをしてくれる人はこれまでにいなかった」と機構の担当者が驚き恐縮した。



土屋義彦さん（5月30日の当協会懇親会にて）

「参議院議員のとき議員派遣団の一員として初めてアルゼンチンを訪問してこの国が好きになりました。最初から（呼吸が合って）好きなんです。帰ってきてから日本アルゼンチン友好議員連盟を作りました。私のあとの会長が小淵恵三さんです。あの人もアルゼンチンが好きでした。」

自然は美しいし心の豊かな人が多いし、懐の深い国ですよ。日露戦争のとき新鋭艦2隻を日本に譲ってくれたり、終戦後われわれが食料に困っていたとき大統領のエバ夫人が小麦粉を満載した船を出してくれたりしたことはずっと覚えています。何回目かのアルゼンチン訪問のときアルフォンシン大統領が『日本人はまじめで正直で清潔だ。移住希望者はいつでも受け入れる』と言ってくれたのはうれしかったです。将来も食料に困らないのは世界中である国だけです。仲良くしておきたいですね。」

「去年6月に埼玉の有力者の方々に声をかけて一緒にまた行ってきました。6回目のアルゼンチン訪問です。日本人移住者の集まりで私はハーモニカで「夕焼け小焼け」や「人生の並木道」を吹きました。みんなしみりしていました。」

一前に桜の木を贈られましたね。

「フラギオさんという駐日大使がアルゼンチンに帰ってから亜日協会会長になられたのですが、あの人が桜が好きでね。それで協力の意味で桜の苗木を贈りました。オ

リーボスの大統領官邸やブエノスアイレスの日本庭園、それにコルドバの公園 Parque de las Naciones に植えられたと聞いています。

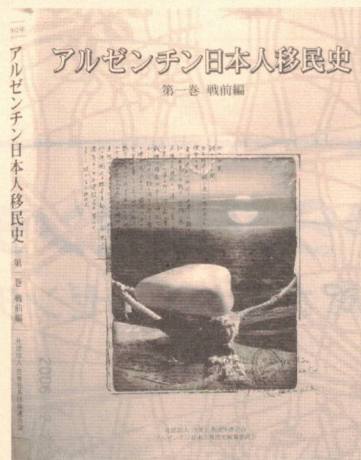
### —アルゼンチン以外の国とは？

「私は終戦の時召集兵として軍隊にいました。あの時軍隊にいたおおぜいが亡くなりました。落ち着いてから慰霊法要にまわったのです。ラバウル、グアム、サイパン、ペルリュー。インパールも訪れました。それが海外との交流のきっかけです。これまで訪れた国は80数か国です。パラオの酋長が難病に罹り日本の病院に入りたいというので世話をしました。しかし亡くなってしまった。遺族が遺体をそのまま運びたいという。普通の航空便では難しいのです。考えて在日米軍の司令官に頼みました。米軍機がパラオまで飛んでくれました。ニカラグアのチャモロ大統領が訪日したとき「教育の荒廃で困り果てている。何とか手を打ちたい」というので、財務官に頼んでIMFに援助を要請してもらいました。私は今ニカラグアでは尊敬されているようです。ドイツ統一前の東独の最後の首相モドロが来たとき下田へ連れて行って一緒に露天風呂へ入りました。たいへん喜んでいました。」

「ドイツ統一のため“戻ろう”（モドロ）と言ったのですが、この洒落通じたかな？」

「外交は政府対政府が基本ですが、並行して草の根外交も力を入れなければいけないと思っています。地方自治体ももっと国民外交に取り組まなければならないと思います。」

「2005年12月に埼玉の同志を募って「埼玉・アルゼンチン友好協会」を立ち上げました。会員は200人です。親元とも言うべき日本アルゼンチン協会も会員を増やしたいですね。」



\* アルゼンチンの日系団体「在亜日系人団体連合会」（通称FANA）は2002年に日本人移住者の記録「アルゼンチン日本人移民史」戦前篇の日本語版とスペイン語版を刊行した。次いで戦後篇の編纂に着手したが、資金が不足し日本



アルゼンチン協会の土屋会長に協力を要請した。土屋会長の尽力で、「大阪万博記念機構」、「トヨタ財団」それに埼玉県の有力者らが募金に協力した。戦後篇のスペイン語版

は2005年に刊行され、日本語版は刊行準備中。

\* 土屋さんは現在、日本アルゼンチン協会会長、埼玉・アルゼンチン友好協会名誉会長。

## アルゼンチン日系団体が困窮同胞救援へ

河崎 勲

アルゼンチン各地にいる日系人3万5000人の中に、移住者の高齢化やアルゼンチン経済の悪化で生活が極度に苦しくなった人たちが出ている。FANA「在亜日系人団体連合会」は数年前からJICAの支援を受けて困窮移住者の実態を調べてきた結果、見逃しておけない人たちがいるとして救援対策に乗り出した。

対策は、ブエノスアイレス州のグレウ移住地に中古の建物を購入、保護施設として補修し高齢で身寄りのない生活困窮者に入ってもらうもの。

開設事業費32万ドルのうち23万1000ドルは、今年(2006年)2月に日本の「日本財団」からの助成が決定した。この助成決定にはFANAの要請を受けた日本ア

ルゼンチン協会の土屋義彦会長が尽力した。その他の支援金やチャリティーなどで集めた資金も投入する。

FANAは、生活支援の必要な日系人110人のうち緊急を要する20人にとりあえず入ってもらうことにしている。施設は元農業試験場だった建物で、ここに居室、炊事場等を整備し、ベッド、車椅子などを備える他リハビリのための有機野菜栽培場などを作る考え。生活費には日本の外務省からの支援金も充当する。1人が住み込みで、あとは非常勤の人たちが世話をする。

(いさお かわさき、当協会理事)

## 日亜関係拡大・強化に向けて

～アルゼンチンへの企業進出体験～

勝田 富雄

私は1995年4月～本年2月までの約11年間アルゼンチンに駐在しておりました。この間アルゼンチン共和国の大統領は5人代わり、大幅な為替変動(1ドル1ペソから最大3.8ペソ)、2002年にはデフォルトもありカントリーリスクは先進国並(450)から一挙に北朝鮮、イラク並み(6300)になる等、激動の中で自動車を生産し、輸出・販売する事業を立上げ、拡大してまいりました。私の約11年間におけるアルゼンチンでの経験が少しでも“日亜関係拡大・強化”に役立てることができるならこの上ない喜びであります。

### アルゼンチンへの製造業進出促進

デフォルト、政治経済の混乱の真只中の2002年9月に、2億ドルを投資してアルゼンチンにトヨタの世界戦略車IMVの南米拠点化を図るプロジェクトを公表し、計画どおり2005年2月には新モデルのラインオフ式をキルチネル大統領を向かえ執り行いました。このプロ

ジェクトはアルゼンチンの政財界・部品工業会および一般国民より大きな賞賛を得ることができ短期間の間にトヨタのアルゼンチンでの地位と信頼を確実なものとするのに大きな効果がありました。昨年はこの新モデルの輸出に伴いアルゼンチンでの全輸出企業の中で金額ベースで15位、製造業では2位、自動車産業では1位の輸出実績



キルチネル大統領とラバーニャ前経済大臣の工場訪問



を残すことができました。立ち上がり時（'97年）に比べ、従業員数は700名から2500名に増え、生産台数も本年は3～4倍の6.5万台を計画しております。

何故、このような結果を出すことができたかを分析いたしますと次のことが特筆できると思います。

- 1) 日本の（トヨタの）物造りの基本を忠実に実施したトヨタ生産方式の導入、品質第一を優先 etc.
- 2) トヨタの世界戦略車の位置づけでグローバルな展開が図れた＝本社及び他地域との協調が図れた。
- 3) 世界で4番目に日系人が多い国で、在亜日系人の協力・支援、及びこれまでに積み上げてくれた日本人への信頼があった。
- 4) 進出日系部品メーカー（伯・亜で16社）の強い支援・協力が得られた。

まとめますと、日本の物造りの基本、当たり前の事を実行すれば（これが少し難しいのですが）まだまだアルゼンチンでは製造業でも結果が出せると言えます。また、自動車で見ればアセアンに匹敵するメルコスール市場があるが日本車のシェアはまだ低く、拡大・進出のチャンスは十分にあると言えます。



トヨタ・アルゼンチンZARATE工場全景写真

## 豊かな土地と地理的な条件の活用への投資促進

世界を見た時に、とりわけアジアではまだまだ人口・所得は増え続け、穀物や牛肉などの需要は拡大されると言われています。然しそれらを輸出できる国は少なく、数少ない輸出国のひとつがアルゼンチンです。

欧米、中国人の投資家などはかなりの規模でアルゼンチンの土地を買っているという情報は良く聞きましたが、日本人がアルゼンチンの土地に投資しているという話はあまり聞かず、私の知る範囲では3～4例に過ぎません。その中の2事例を挙げたいと思います。

- ① 日本のある県が土地を買い、会員を集めて無農薬で大豆栽培をし、日本で豆腐を作って供給・販売。
- ② 日本の商社がブドウ畑を所有し、ワインを生産し、日本にバルクで輸出。

また、アルゼンチンから日本への牛肉の輸出は解禁されておりましたが、最近、肉牛生産者の一部少数でアメ

リカより和牛の精子を輸入して和牛の生産を試みているグループも出てきており、将来は日本市場への輸出も期待できます。

アルゼンチンと日本は最も遠い位置関係にあり、韓国や中国との関係の様に利害関係が一致することも少なく、お互いの良いとこ取りだけをした事業も成り立つと考えられます。例えば、

1. 日本の物造りを基本とした製造業（中南米などへの輸出拠点として）
2. 夏・冬の季節が逆を利用した事業。  
例；日本の冬にアルゼンチンで米栽培
3. 時差・12時間を活用した事業  
例；ITのソフト等日本の帰宅時間に依頼をしておけば翌朝には回答が来ている。ソフト事業を拡大し成功している日本企業もあり人材のレベルは高いと聞いている。



勝田氏とトヨタのピックアップHILUX

## まとめ

「日亜関係拡大、強化」のためには日本からの投資を促進し、経済関係を拡大強化することが重要と考えます。

中長期的にはまだまだ信頼が薄いアルゼンチンの政治・経済の中で積極的な投資、進出はまだ時期尚早で、危険であるという意見もありますが、一方では日本企業が投資を始めたら投資は差し控えたほうが良い、何故ならば一般的に日本企業は慎重に検討・決断する為、結果が見えるピークに近いところで進出・投資して、遅すぎるケースが多々あるという見方もあります。

従い、上述した分野を始めとして進出をするなら、私は今が検討すべき時期と考えます。増え続ける人口や所得に伴う食料需要増に対して、将来とも穀物や牛肉など輸出できる国は数多くありません。このことからアルゼンチンは長期的には安定的な国であるといえると思います。

（かつた とみお、中部工業（株）専務執行役員、前トヨタ・アルゼンチン社長）





# アルゼンチン代表 W杯 出場

APATIA DE ARGENTINOS 2006

～無関心を装うアルヘンティーノス、その心は～

北山 朝徳

ワールドカップ2006南米予選の突破は、「ごく当然」と云う雰囲気以て終わり、さあ大会に向けて熱狂的な騒ぎが到来する！の予想は外れてしまい、古い師や予想屋にはなれないと自覚することになりました。そうです、大会寸前と云うのに今、アルゼンチンの国では、題名の通り、2006年大会での代表チームへの期待、選考されたプレイヤーがどうのこうのの侃々諤々な会話が全く見えない情景であり、これまでのワールドカップ前と雰囲気が大きく違っておるのです。

マスコミと代表チームスポンサーとなっている会社を除く全国民、正に無頓着、無関心、無感動、無感覚であり冷淡的にも思える光景の出現となっております。

これはワールドカップ・2002年大会の亡霊がア国中を彷徨っておるからとしか考えられない、と結論することになっております。2002年大会の無残な結果が、恰も国民性を変えてしまったのか？と疑問を持つことになっております。自尊心、自意識の高さが特長と云われたアルゼンチン人、「W杯のチャンピオン候補はブラジル！」とこれまでライバル心を剥き出しにしていた隣国ブラジルを持ち上げておるのです。

2002年以降、性格が謙虚になってしまったと信じてよいのか、と問われる合、全面的に肯定することにも疑問を持つことになっております。CABALA=縁起を担ぐことが生活の一部になっているアルゼンチン人ですから、「チャンピオン候補」を強く叫ばれた代表チームの結果は、2002年同様になると胸の奥深くで「そうなれ！」と深慮遠謀しておる可能性もあるのです。



アルゼンチン代表チーム

2001年末の社会動乱、政変そして経済的混濁があったため、日韓W杯の応援に行ったのは、フットボール関係者とマスコミ関係者が殆どで一般サポーターは極端に少なかったのはご存知の通りです。

代表チームに対する話題、期待の声の高まりは見えないのですが、組み合わせ抽選会が終了してマスコミで騒がれたのは、ドイツとの時差が5時間で学校の授業と試合時間が重なることから休講にすべきか、教室にテレビを持ち込んで観戦させるかと云うことでした。

「対戦相手国のコートジボアール、セルビア・モンテネグロなどがどのような国かを指導できる社会学に繋がる」が、テレビで観戦させることを肯定する側、「フットボールはスポーツの一つ、児童や学生は学問に勉めることが義務」と云うのが否定派でしたが、政府は教室でのテレビ観戦を許可しました。

先日、ブラジルのサンパウロで発生した暴動の発端は、麻薬売買団が刑務所にいる同僚達に60台のテレビを配りW杯を観戦させたい要求を許可しなかったことからでした。アルゼンチンの刑務所は、観戦させるかどうかは報道されておりませんが、学校でテレビ観戦を許可していなかったら、暴動になった？暴動が発生することは無いでしょうが、生徒も教師も自主的にサボって学校はガラガラの光景になったと予想されますが、、

これまでのワールドカップ大会前と違い、熱気の盛り上がりが見えない雰囲気、こう云うことは代表プレイヤーにも影響することから、AFAは急遽5月24日夜、壮行試合を挙行することにしました。相手は、20才以下のA代表チーム、入場券も格安にして、壮行試合などは今まで一度も行ったことはありません。

この試合の目的は一つ、大勢の熱狂的サポーターを集めてその熱意を代表選手全員に感じさせ奮い立たせることでした。

リーベル・プレイ・スタジアムに五万人近いサポーターを集め、テレビで実況放映をして代表23名の紹介を始め、数々のイベントを挙行しました。

選手全員が「この熱気に勇気を与えられた。アルゼンチン国民全員が感動するような大会にしたい！」と決意を述べ、AFAとしての目論見は達成されました。





壮行試合にて声援を受けるチームメンバー


APATIA=無関心、無感覚のような状況に有りながら、観戦チケットは完売され不足しておることは、アルゼンチン・フットボール協会=AFAを困らせる状態となっています。これは経済的に好転しているアルゼンチン国を象徴しておることも一因であると思いますが、無関心さを装うウラに「強い関心」を持っていることを示しておる訳です。AFA 割り当ての一般観戦チケット、報道関係者そしてFIFAのインターネットを通じて購入した国内および国外在住者を推計したら、約1万6000人のアルゼンチン人がドイツに行くと推測されています。

APATIA =無関心的な雰囲気、無頓着を装う国民、常にライバルのブラジルをチャンピオン候補と言う謙虚さ、ア国民の特長と云われている自尊心と自意識の高さが顔に出ず、口にせず、、初めての壮行試合、もしかし

たら、これら全部がCABALA =縁起担ぎかも知れません。

それらがどう云う結果になるか、心の奥深くでは20年も遠ざかっているW杯チャンピオンの座を強烈に念願しておることは確かな事実であることに間違い無いアルゼンチン国民全員のワールドカップ2006・大会前でありま

(きたやま ともりの 在アルゼンチン トーシンググループ代表、日本サッカー協会南米代表)



**TOSHIN TOURS S.R.L.**  
E.V.T. Leg.6801-Res.6238/88

信頼と安心のネットワーク、あなたの個性に合わせた旅をレアウト致します。


**東進ツアーのサービス内容**

- 航空券の予約 (国内、海外線)
- 長距離バスの予約 (国内、隣国)
- ホテルの予約 (国内、海外)
- パッケージ旅行の手配
- 市内観光、タンゴショー、エスタシオ日本語、英語ガイド (レギュラー、プライベート)
- 送迎サービス (西語、日本語運転手)

お問い合わせ: Av. Juan de Garay 2281  
C1258AAE Buenos Aires, Argentina  
Tel.: +54-11-4841-4700  
Fax: +54-11-4843-4276  
mail: tours@toshingroup.com  
web: toshingroup.com

担当: 堀内クリスティーナ  
水田リラ

**DCS BOOK SHOP S.R.L.**



## アルゼンチン代表W杯出場その2 ～決勝トーナメント進出決定!～

アルゼンチン代表はオランダ、コート・ジボアール、セルビア・モンテネグロと言う強豪ひしめく「死のグループ」と言われたC組にランクされましたが、6月11日の初戦でコート・ジボアールを3:1で破り、16日のセルビア・モンテネグロとの第2戦では何と6:0の大差で圧勝、早々にオランダと共に決勝トーナメント進出を決めました。

特に、第2戦ではアテネ・オリンピック金メダルで大活躍したテベス選手のゴールやマラドーナ2世と言われるメッシの初出場・初ゴール、そしてTVで映し出されるマラドーナの熱狂応援の姿など、話題性にも富み、その実力をいかに見せつけました。

今回代表にはベケルマン監督が1995～2001年にユース代表監督として3回優勝した時の愛弟子11人が入っており、20年ぶりの優勝も現実味を帯びてきたと言えます。17日付けのスポーツ新聞記事(メッシ選手



初ゴールと応援中のマラドーナの写真入り)をご覧ください。

(編集長記)



# 日亜関係拡大・強化に向けての新たな戦略

ホルヘ・オセラ

日亜双方の経済発展が新たな段階に入り、アルゼンチンが民間債務返済の交渉を行っている状況下、今や両国関係は新しい局面へと踏み出す条件が整ったと思われます。

過去の難局を乗り越え両国の貿易とアルゼンチンへの日本の投資の拡大を計ることと考えます。日亜両国間の経済が相互補完性を持つことによって新しい局面が開けてくるでしょう。

両国は歴史的な絆のみならず、民主主義、人権、正義、世界平和と安全保障、軍縮などにかかる意見の一致と共通の価値観の下、過去の余り野心的でなかった政治・経済関係を見直し、両国民や人類の利益と幸福を追求するという共通の目的に進捗する用意が整ったと思われます。「日本は参入困難な市場である」、「過去の経緯からアルゼンチンへの投資は不可能である」といった先入観を捨て去ることが大切です。

トヨタ自動車、NECをはじめとする日本の企業もこれを理解しております。アルゼンチン企業の250社以上は日本市場向けに産品を輸出しております。然しながら、まだまだこれでは充分ではありません。単に産品を売るとか投資を行なうというのではなく“両国間の完全な関係樹立の為の戦略”を売り込むことが必要です。

私はかかる戦略には次の要素が含まれるべきと考えます。

1. 両国の政府、議会、企業家、芸術家、スポーツ選手などの相互訪問：扇参議院議長や佐々木日亜経済委員



オセラ公使

会日本側委員長の如き政財界要人が本年8月～9月にアルゼンチンを訪問し、政治、経済にかかる対話が行われることは両国の新たな関係の樹立に向け効果的であります。相互理解により信頼関係が築かれ戦略の成功が保証されるでしょう。

2. 貿易の拡大：両国企業家の見本市や展示会への参加を通じての関係強化。

3. 海外投資分野の決定：京都議定書に基づくクリーン開発メカニズム（CDM）を活用する上で、エ

ネルギーや鉱業の分野が有望です。

4. 観光と文化は両国民の心に浸透させるツールとして重要な戦略の要素であります。

両国民共通のタンゴへの情熱や美しい自然風景への感嘆は恒久的かつ有益な両国関係の緊密化を築きます。

以上、日亜両国の新たな関係の樹立につき簡単なスケッチを描かさせていただきました。

我々皆で両国民とその子孫の利益と幸福をもたらそうではありませんか。

注) 本寄稿は筆者の個人的な意見であり、アルゼンチン外務省の見解を必ずしも反映するものではありません。

(Ministro Jorge Osella、在日アルゼンチン共和国大使館公使)

## 在日アルゼンチン共和国大使館外交官リスト（2006年6月現在）

Embajador Daniel D. Polski

Ministro Jorge Osella

Ministro Diego Capelli (Finanzas)

Secretario Marcelo Cesa (Sec. Comercial)

Secretario Federico Navia (Sec. Consular)

Secretario Sandra Winkler (Sec. Comercial)

Secretario Pablo Rodriguez Brizuela (Sec.

Cultural, Sec. Prensa y Cuestiones Políticas)

Srta. Cristina Tsumura (Administración)

特命全権大使 ダニエル・D. ポルスキ

公使 ホルヘ・オセラ

公使（財務部） ディエゴ・カペリ

書記官（商務部） マルセロ・チェサ

書記官（領事部） フェデリコ・ナビア

書記官（商務部） サンドラ・ウィンクラー

書記官（文化、広報、政治部）

パブロ・ロドリゲス・ブリスエラ

総務・庶務担当 クリステイーナ・ツムラ





# 親子二代のタンゴの作詞

## パスクアルとホセ・マリア・コントゥルシ

石川 浩司



タンゴの集いで解説する筆者

VENTANITA DE ARRABAL (場末の小窓) というタンゴをご存知だろうか。MI NOCHE TRISTE (我が悲しみの夜) や LA CUMPARSITA (ラ・クンパルシータ) といったタンゴ史を飾る名曲を作った Pascual Contursi パスクアル・コントゥルシが作詞しバンドネオン奏者の Antonio Scatasso アントニオ・スカタッソ が曲を付けた。これは1927年にビクトリア劇場で上演されたある軽演劇の中の1曲で、当時人気の高かったイグナシオ・コルシーニが歌った。わが国では阿保都夫さんの情感あふれる歌唱で知られている。

その歌詞はこんな風だ (多分芝居もそういう筋書きだったのであろう)。

「カフェラータの町内の古い共同住宅、煉瓦敷きの床に内扉のない入り口、そこへオルガニートが嘆きの歌を奏でながらやって来る。娘はあの青年が通るのを待っている。あの青年は一人で共同住宅へ入って来た。茶色のソフト帽を目深にかぶり山羊皮のブーツに光るカラー、ギターを手にして彼女のために1曲歌った……」

この頃のタンゴは男が女に捨てられるのが普通なのだが、この曲では純真な彼女が手練手管にたけた青年に捨てられる。だからこのタンゴは一段ともの悲しく聴く者の心を打つ。

筆者はこのタンゴを聴いてその舞台となっているカフェラータの町が何処にあるのかを知りたくなった。ブエノスアイレスの地図で見ると F.CAFFERATA という通りがラ・ボカの一角にある。多分此処であろうと見当を付けて、拙著「タンゴの歴史」では「ラ・ボカの一角にあるカフェラータ通りの古い共同住宅……」と書いた。

ところが、この本が出版されて間もなくAさんというタンゴ・ファンの方から懇切なお便りを頂き、筆者の間違いが指摘された。「ラ・ボカにあるカフェラータは短い道で、原詞にある Barrio Caferata ではないと思います……」確かにバリオと言えばかなりの広がりを持つ地域を指すわけで、通りをバリオと思ったのは大間違いだ。だがブエノスアイレスのバリオにカフェラータというのは見当たらない。

そうこうしているうちにBさんから昔「バリオ・カフェラータ」と呼ばれていた地域がブエノスアイレスの西方にある。自分も興味を持っていたので前回のブエノスアイレス旅行の際、現地の友人を煩わせて其処を訪ねて来た、というお便りを頂戴した。Bさんが現地の友人から得た情報によれば、その地域は地下鉄E線の Emilio Mitre 駅、Chacabuco 公園の近くで Asamblea, José María Moreno, Estrada, Riglos といった通りに囲まれた地域で、1915年から1921年にかけて3~4室に厨房、浴室、テラス、庭付きの勤労者・労働者向け住宅が約160戸建てられたが、現在は残っていない……という。そしてこの団地は当時の有力議員 Caferatta の尽力で建設されたので、その名前が付いているのだそうだ (厳密には若干スペルが違うが) Bさんは実際にこの場所を訪れ写真も写して来られたが、現在は一段と高級住宅が連なる地域で往時の面影はないという。筆者はここを訪ねたことはないが、以前この近くに住むバンドネオン奏者 Ernesto Baffa エルネスト・バッファ氏の住居を訪ねたことがあり、地続きの元カフェラータの現況は想像がつく。

元カフェラータの建設完了が1921年で「場末の小窓」の作詞作曲が1927年だとすれば、当時まだ「共同住宅」が残存していたことは十分考えられるし、この地名が有力議員の名を取ったものだとすれば、大衆演劇の舞台に使われるのも自然のようだ。

このパスクアル・コントゥルシの子供が EN ESTA TARDE GRIS (この灰色の午後) GRICEL (グリセル) CRISTAL (クリスタル) などを書いた José María Contursi ホセ・マリア・コントゥルシで父子二代の作詞家ということになる。

父のパスクアルは1888年生まれ、彼が成年に達するころタンゴは発展期に入っていたが、まだ歌のタンゴが確立されるには至っていなかった。パスクアルの本職は「操り人形師」兼「靴の販売人」更に流行のタンゴに適





Riglos と Asamblea の角 (現況)

宜歌詞を付けて歌う歌手であった。「竿だけ屋は何故潰れないか」の知恵があったようだ)この人は史上最初の歌のタンゴ「わが悲しみの夜」の作詞家として評価されているが、この曲はもともと「リタ」という曲で「わが悲しみの夜」はコントゥルシが勝手に付けた詞なのである。(もう一つの歴史的名作「ラ・クンパルシータ」だって作曲者に断りなしに付けた詞がヒットしたのだ)まあ、このエピソードは当時のタンゴ界というものを見せ付ける話なのだが、もう一つのエピソードに筆を進めよう。コントゥルシは21歳のときイルダ・ブリアモ Hilda Briamo という15歳の娘と「出来ちゃった婚」をしている。そして生れた子供がホセ・マリア(1911年生まれ)である。しかしこの夫婦は1913年、ホセ・マリアが2歳の時に離婚してしまい、ホセ・マリアは家庭の温かさを知らずに育ったようだ。

その後ホセ・マリアは作詞家として成功した父親の支援で高等教育を受け、文筆の才能にも恵まれて1930年代には作詞家、映画評論家、ジャーナリストなどで力量

を發揮しラジオ・ステントルのアナウンサーも務めた。1932年には父親と同じ21歳で結婚したが、良いことばかりは続かないもので、以降ホセ・マリアにとっては疾風怒涛の30年ということになる。

即ち1932年、父パスクアルが精神病院で死去、続いて実母がアルコール中毒で発狂し病死、1950年には妻 Alina Zárate アリーナ・サラテが4人の子供を残してガンに倒れる。

この間ホセ・マリアはコルドバ郊外に滞在中 Susana Grisel Vigano スサナ・グリセル・ビガノという娘と知り合い、彼女から得たインスピレーションを基に前掲のヒット曲を連発するが、不倫とも言える交際は持続せず、グリセルも他の男と結婚してしまいホセ・マリアは上記の如き厳しい環境に苦しんで次第にアルコール依存症になる。(両親の負の遺伝子を継承していたのだろうか?)さらに1955年のペロン体制の崩壊前後には文筆活動に当局からの種々の干渉もあったようで、ホセ・マリアは4人の子供を抱え経済的にも困窮の度を加えていたようだ。

1962年になって漸く疾風怒涛の30年が終わる。この年バンドネオン奏者のシリアコ・オルティスの仲介でホセ・マリアとグリセルは再会し(その時点で二人は独身になっていた)二人は家庭を持った。しかしホセ・マリアはアルコール依存から脱することは出来ず30~40年代の素晴らしい業績に照らせば何の業績も残すことは出来なかった。

ホセ・マリアは1972年3月11日にコルドバで亡くなった。グリセルが亡くなったのは1994年6月15日のことである。

(ひろし いしかわ、当協会理事)

## 回復続くアルゼンチン経済

小林 晋一郎

未曾有の経済危機に陥ったアルゼンチン経済は2002年第2四半期から回復過程に入り、15四半期続いてGDPはプラス成長を記録、その結果、GDPは危機前のピーク時を上回った。2005年のGDPは前年比+9.2%と高い成長率を記録した。項目別では、前年比で民間消費+8.9%、公共部門+6.2%、粗固定資本形成+22.7%、財・サービス輸出+13.8%であった。当初は輸出部門が経済回復を牽引したが、その後、回復は個人消費、民間投資に拡大した。工業生産は2002年以降、年率10%で増大、

粗固定資本形成は2002年第4四半期から増加過程に入った。消費者信頼感指数は2001年第2四半期から2002年第3四半期の平均34から2002年第4四半期から2006年第1四半期の平均53へと顕著な改善を示した。

このような経済成長が今後も続くだろうか。2006年4月に発表されたIMFの「世界経済見通し」で、アルゼンチン経済について、「増大する内需と輸出の伸びに支えられて経済拡大の力強さは続くだろう。しかし、設備能力の制約が浮上し、インフレは競争力を阻害し、経済成



長は鈍化するだろう。2005年の財政は、歳入の好調な伸びで、予算より良好な結果となった。今後は、内需拡大を抑制し、インフレ防止のため、予算以上の財政黒字、高金利、弾力的な為替相場の複合的政策が必要だろう」と問題点を簡潔に指摘している。IMFはGDP成長率を2006年+7.3%、2007年+4.0%と予測している。

経済の最大の懸念はインフレ圧力だ。好調な輸出と設備稼働率の上昇で、国内への供給が逼迫し物価を押し上げている。IMFは上記報告書の中で消費者物価上昇率は2004年の4.4%から2005年には9.6%と倍になり、2006年は二桁の12.9%を予想している。政府は、牛肉の輸出禁止、牛肉輸出課税金の引上げ、業界団体や個別企業との価格協定など市場原理に基づかない異端的政策で物価抑制に努めている。しかし、経済界ではこれら政策に反対の声が強く、エコノミストもこのような対症療法では物価上昇を短期的には封じ込めたとしても、長続きしないと批判している。

対外部門は輸出が堅調で2005年の輸出は前年の345億ドルを上回る400億ドルに達した。景気回復で輸入が213億ドルから273億ドルに増加し、貿易収支は前年の132億ドルから127億ドルへと黒字幅は縮小した。しか

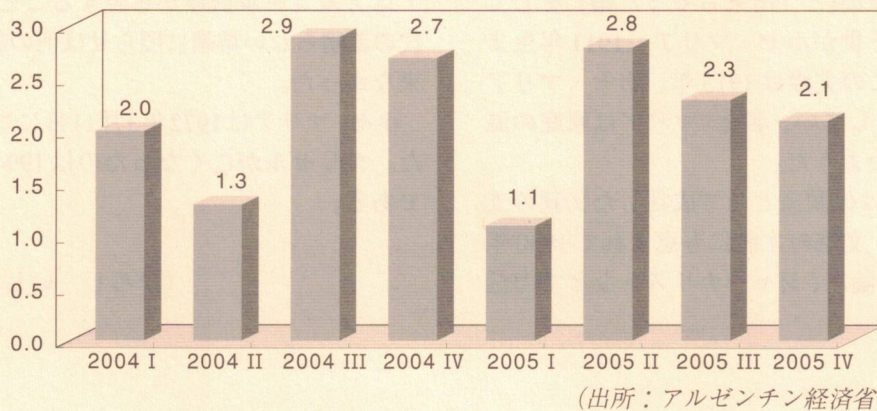
し、所得収支の赤字幅が大きく縮小したことが経常収支の黒字拡大に寄与し、2005年は54億ドルと前年の33億ドルを上回った。

好調な対外部門を背景に積み上がった中銀の外貨準備を活用し、2006年1月3日にIMFに対する債務全額95億3千万ドルの一括期限前返済を実施した。外貨準備は返済前の280億ドルから185億ドルに減少した。貿易黒字による市場での余剰外貨を中銀が為替市場で買い介入した結果、外貨準備は222億ドルまでに回復した。中銀の為替市場介入の結果として増大するペソ流動性の不胎化のため、銀行への危機対応融資の返済促進、公的部門の外貨購入、中銀手形の発行など複数の手段によっている。ペソの対米ドル為替相場は引続き中銀介入により、3.085前後で推移している。

公共料金の価格自由化を含めた公益事業部門の改革、インフラ部門への投資、投資促進による供給力の拡大が中長期的課題だ。

(こばやし しんいちろう、三菱UFJリサーチ&コンサルティング客員研究理事・当協会理事)

四半期毎 GDP の季節調整済み前期比成長率 (%)



## ロック・ナショナルという音楽

有賀 裕子

アルゼンチンと自分が関わりを持っていくことになるとは、正直の所、夢にも思っていませんでした。なにせ日本から一番遠い国、日本の反対側、学校で学ぶことも殆どなく、身近にアルゼンチンの人がいるわけでもなく、日々の生活の中でこの国の名前を聞くのはごく稀なものですから。それが今、こうして原稿を書かせていただいていることに人の縁の不思議さを実感しています。

私がアルゼンチンに興味を持つようになったきっかけは、ペドロ・アスナールという一人のミュージシャンでした。タンゴでもフォルクローレでもなくロックです。彼を知ったのは1984年に発売された「パット・メセニー・グループ」の”ファースト・サークル”というジャズのアルバムで、ギター、パーカッション、ボイスを担当するマルチプレイヤーとして参加していました。グラ



## Pedro Aznar "El arte del ingeniero está en escuchar lo que pide la canción"

Está por publicar un DVD que incluirá su concierto en el teatro ND Ateneo basado en la música del Brasil. Acaba de ganar el Carlos Gardel al "Mejor ingeniero de sonido" por su trabajo en el disco Limbo de Roxana Amed (álbum que además produjo). Un nuevo galardón para este artista que guarda en su casa-estudio de Belgrano los Grammy que testimonian su paso por el Pat Metheny Group. Desde su amor por Los Beatles a Madre Atómica: de Serú Girán a Bersée: de Pat Metheny a la canción latinoamericana: Pedro Aznar abre su memoria musical y habla de todo.

POR ROQUE DI PIETRO



ペドロ・アスナルの新聞記事

ミー賞を何度も受賞している超一流グループの一員として演奏しているのですから、ギターもパーカッションも抜群に素晴らしいのですが、なんととってもその声に一発で打ち抜かれてしまいました。

これまでに聞いたことのないストレートで伸びやかな透明感、どんな楽器も適わないような声の持ち主のペドロ・アスナルとはどんなミュージシャンなのか、その正体を知りたいと思ったのがアルゼンチンへの入り口でした。1989年まで、大使館やレコード会社、音楽関係の雑誌社など考えられる限りの方面に問い合わせましたが、彼について詳しく知る人はおらず、レコード店においてあるアルゼンチン音楽と言えば当然タンゴ、せいぜいフォルクローレという状況でした。

万策尽きたと諦めかけていた1990年4月、グループのツアーで来日し、彼と直接会う事が出来ました。初めて目の前で演奏し歌う姿を見て、アスナルの作る音楽はどんなものなのか益々知りたくなり、もう現地に行くしかないと一念発起、アルゼンチン行きを決意したのが運のつき、以来すっかりはまってしまい毎年アルゼンチン詣でを続ける事になりました。

アルゼンチンの音楽といえば、やはりタンゴが一番に思い浮かぶと思いますが、実はアルゼンチンでなければ生まれなかっただろうと思われるような個性的なものが沢山あります。そんな個性的な音楽を「ロック・ナショナル」と呼んでいるのですが、ヨーロッパやアメリカのロックを模倣した単純なロックではなく、フォルクローレのリズムや楽器をベースにしたり、タンゴの要素をふんだんに取入れたり、ジャズ色の強いもの、レゲエやラップの影響を受けているものなど一括りでロックと言えないほどバラエティに富んでいて、新しい音楽がどんどん創り出されています。1966年に出版されたロック・ナショナル30年の本には、新しい音楽を生み

出してきたミュージシャンたちの歴史がびっしり並んでいます。

私が惚れ込んでしまったペドロ・アスナルはアルゼンチンばかりでなく、ウルグアイ、チリやペルー、ブラジルでもトップクラスの人気を誇るロックスターの一人です。父親がタンゴのバイオリニストだったこともあり、毎日タンゴのレコードがかかっている家庭で育った彼は、7歳の時にビートルズの「リボルバー」を買ってもらった時から音楽の虜になり、9歳からギターを習い始めます。12歳の時にはガレージバンドでリードギターを弾き、15歳で「マードレ・アトミカ」というバンドでプロ活動を始め、この時からアルゼンチンのナンバーワン・ベーシストへの道を突き進みます。



ペドロ・アスナルの演奏

1977年、フォルクローレとタンゴをロックやジャズと融合させる斬新な音楽の先駆となった「アラス」というバンドに参加してネストル・マルコーニとの共演も実現した後、1978年からはアルゼンチン・ロック界の神様、チャーリー・ガルシア率いる伝説のバンド「セル・ヒラン」のメンバーとして絶対的な人気の頂点を極めていきます。当時は軍事政権下の暗黒時代で文化人や知識人が迫害を受け、亡命を余儀なくされたミュージシャンも多くいた中で、セル・ヒランは政治的弾圧を受けることもなくドラマチックでメロディアスな曲と知的な詩で民衆の声、レジスタンスの声を歌い続けました。「セル・ヒラン」が軍政府のお咎めを受けなかったのは、軍人達がロックを気にも止めなかったのと詩の中に隠された抵抗のメッセージを理解できなかったお陰だとか。5枚のアルバムを発表して1982年に解散してしまった「セル・ヒラン」ですが、「アルゼンチンのビートルズ」として今でも熱狂的なファンが沢山います。

次回からはロック・ナショナルを代表するアルバムやミュージシャンをご紹介します。

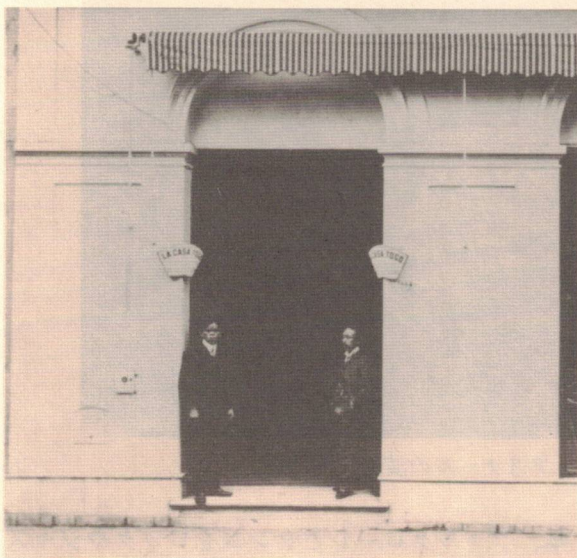
(ありが ゆうこ、アルゼンチン音楽愛好家)



# 日亜貿易の先駆者、瀧波文平

滝波 アントニオ

丁度100年前、アルゼンチンに組織的な日本人移民が未だ始まって居らず、又ブエノスアイレス市にはたった3名しか日本人移住者が居なかった時、日亜貿易の先駆者と呼ばれた瀧波文平がアルゼンチンに到着した。それ以前に日本製品を時々輸入販売していた商店はあったが、瀧波文平がブエノスアイレス市に日本及び亜国製品の輸出入商店を設立した事実をして、後に日亜貿易の出発点と呼ばれる事となった。



Casa Togo 向かって右が瀧波文平氏

瀧波文平は福井県大野市で明治4(1871)年2月に生まれた。

福井県の学校を卒業後、14才の時、武家の出ではあったが商業に就くことを選び『注2』一人で京都へ出て貿易商で勤め始めた。その貿易商は日本刺繍を販売、特に外国に売っていた。

同社が神戸に支店を開いたとき支店長に任命された為、神戸に移転した。21才になった時に独立し、同じく神戸市で輸出入会社の経営を始め、生地から離れた時の夢を実現した。

明治27(1894)年日清戦争時、中国に渡り日本軍に食料品を供給した。その後、北京に貿易拠点として海外第一号店を開店した。これらの事業で満足し得る収益を得た。

終戦後ロシアとの貿易が盛んになると予測し、満州地方に移動しハルピンの他、数ヶ所に支店を開いた。

1904年2月4日、日本が在露日本大使館を引き上げ、日露戦争が開始した。支店の火事、奪略、強盗等に合った他、スパイ容疑で監禁状態で取り調べられる等辛い経

験をした。その為、日本が戦争を起こすことの無い国と商売すべきと決心した。

日露戦争の時期、次の商売拠点を模索し始めた。明治32~33(1899~1900)年頃アルゼンチン共和国の練習艦サルミエント号が神戸に寄港した時、乗組員が珍しそうに日本製品を見て居たことを思い出し、次の目的地は遥かに遠い、知られざる南米の国、アルゼンチン共和国の首都ブエノスアイレス市と決断した。

明治38(1905)年4月30日、店員一名を伴って神戸港を出発した。シンガポール近海で強力なソ連のバルチック艦隊と擦れ違った。日露戦争の進行情報無く、残した家族の運命も知らず、最悪の状態を恐れていたがスエズ運河を通過する時、船員及び船客達に祝福された。言葉が通じないため、日本が日露戦争に勝利したのではと思いつつも確認できなかった。その後ジェノア港に到着し、やっと日本領事館で日本が戦勝した事が確認でき安心した。

その後、イタリー船に乗り換え、目的地ブエノスアイレス市に到着したのは明治38(1905)年8月21日であった。

言葉も全然通じず、多くの困難や不便を乗り越えて、到着後3ヶ月でやっとブエノスアイレス市の一等地、フロリダ街の664に日本雑貨及び絹製品の小売店を開店する事ができた。日露戦争で活躍された東郷海軍総司令官を賞賛し、Casa Togoと名付けた。これは南米大西洋岸における日本人経営商店の第一号店となった。



Casa Togo 日本雑貨・絹製品小売店

2年後、明治40年、新製品を仕入れる目的及び本国のその後の変化をみる為、ロンドン、地中海経由で帰国した。



その後アルゼンチンは大不景気となり、店が倒産しかかったので直ちに南米に向かい、小売を止め、卸売りへと仕事を替えた。

明治41(1908)年日本郵船に乗船してインド洋、南アフリカのケープタウン、ブラジルを経てアルゼンチンに三度目の旅を行った。アルゼンチンの隣国ウルグアイ国モンテヴィデオ市に支店を開店し卸と小売を兼業した。明治44(1911)年再び品物の仕入れにアンデス山脈を越えチリー、ペルーの市場調査をした後、帰国した。

明治45(1912)年5月ヴラデオストック港より西シベリア鉄道経由でロシア、ドイツ、フランスを視察し南米に再渡航した。欧州の戦争及び経済危機の為、南米も危機に引きずられて居た。東洋からの輸入が困難になった為、東洋との輸送が正常化するまで欧州製品を一時扱った事もあった。欧州の戦争状態が続いたので、日本と南米の貿易が拡大すると予想し其の準備に北米経由帰国した。

1916年、大阪商船が横浜とブエノスアイレス直通航路を開通したのを機会にアルゼンチン共和国とウルグアイ共和国の産物輸入を開始した。

その後数回ブエノスアイレスと日本の間を往復した。其の期間、南米での3番目の支店となるサンパウロ支店を開設した。記憶に間違いがなければ、日本、南米間を計8回往復した。その最後が1941年で、第二次世界大戦前最後の日本船で帰国した。

瀧波文平は1950年、80才で神戸市にて亡くなった。

(アントニオ たきなみ、前在亜日本商工会議所専務理事)

編集者注記:執筆は瀧波文平氏の孫に当たる前在亜日本商工会議所専務理事滝波アントニオ氏が次の物件より得た情報を纏めたものです。

① 瀧波文平手書き経歴書 ② 長男瀧波文夫が亜国日報紙に書いた記事、③ Tejedor/Forni/Falconi/Fragio の亜日1868 - 1946 ④ Sanchis Munoz 大使の日亜関係史、⑤ 在亜日本商工会議所発行40周年記念誌 ⑥ 亜国で発行している La Plata Hochi 新聞掲載記事。



## Resumen en castellano

por Irene Gashu

### La Argentina me gustó desde el principio

#### ~El Sr. Tsuchiya y la Argentina~ (p. 1)

entrevistado por Isao Kawasaki

“La Argentina me gustó desde el principio. Al regresar a Japón, establecí la Asociación de Amistad Nipo-argentina de parlamentarios, y en diciembre de 2005, la Asociación de Amistad Saitama-Argentina que tiene unos 200 miembros”. El Sr. Tsuchiya, que preside nuestra Asociación, también ha ayudado a recaudar fondos para completar el libro: “Historia del inmigrante japonés en la Argentina” de FANA.

### Fortalecimiento de las relaciones entre Argentina y Japón

#### ~La experiencia de la actividad de Toyota en Argentina~(p. 3)

por Tomio Katsuta

El ex-presidente de Toyota Argentina S.A. nos explica

por qué los proyectos de su compañía han dado resultados tan positivos. Para fortalecer las relaciones bilaterales, los japoneses tienen que invertir, es decir, aumentar las relaciones económicas. No hay muchos países que puedan exportar granos y carne vacuna como Argentina. En este sentido, se puede afirmar que es un país estable. Ahora es el momento para empezar a invertir. Después puede ser demasiado tarde.

### El equipo argentino en el Mundial

#### ~Apatía de los argentinos~ (p. 5)

por Tomonori Kitayama

Los argentinos parece que no están tan excitados con el Mundial de este año. Quizás su apatía se deba a que recuerdan la triste experiencia sufrida en el Mundial de 2002. Como los partidos se jugarán durante las horas en que los chicos están en la escuela, no se sabe si dejarán que regresen a sus hogares temprano o si instalarán televisores en las aulas.



## Una estrategia para el relacionamiento entre Japón y la Argentina (p. 7)

por el Ministro Jorge Osella

La nueva situación de crecimiento de las economías de Japón y de la Argentina, respectivamente, junto con la renegociación de la deuda privada de Argentina, son factores para pensar que estarían dadas las condiciones para “cambiar el tono de la relación entre ambos países. Para ello es necesario consensuar una nueva estrategia que tenga como marco de acción los principios y metas cuantitativas de incremento comercial y de inversiones. Esta estrategia debería incluir, a.- Visita de autoridades, parlamentarios, empresarios, artistas y deportistas, b.- Incremento del intercambio comercial a través de ferias y exposiciones c.-Identificación de sectores para la inversión y d.-El turismo y la cultura.

## Padre e hijo: autores de tango (p. 8)

por Hiroshi Ishikawa

Pascual Contursi es el autor de letras de tango tan famosas como “Mi noche triste”, “La Cumparsita” y

“Ventanita de arrabal” que menciona un barrio de nombre “Caferata” pero éste ya no existe. Su hijo, José María Contursi, escribió la letra de “En esta tarde gris”, “Gricel” y “Cristal”. Los dos se casaron a los 21 años de edad. Pascual falleció en un manicomio y José María fue un acohólico.

## Continúa la recuperación económica de Argentina (p. 9)

por Shinichiro Kobayashi

El PBI en 2005 se incrementó en un 9,2%, pero ¿continuará creciendo en el futuro? Aprovechando las reservas acumuladas en el Banco Central, la Argentina pagó 9,530 millones de dólares y canceló toda su deuda con el FMI. La reforma de los servicios públicos, la inversión en infraestructura y el aumento de la disponibilidad de electricidad, nafta y gas natural son los temas a tratar en el mediano y largo plazo.

## El Rock Nacional (p. 10)

por Yuko Ariga

Nunca imaginé que me relacionaría tanto con Argen-

## ホームページにかかるご連絡とお願い

<http://argentina.jp>

前会報No.47にて「協会ホームページの一新、その運用と効果 — 会員の皆さん気軽に掲示板に投稿して下さい!」との記事を掲載いたしました。昨年9月より一新したホームページのアクセス回数が5月末現在(9ヶ月間の)累計5,400件を超え、月平均600件に達しているにも拘わらず会員専用の掲示板に寄稿された方は僅か2~3名で、全く活用されておりました。

最大の理由は会員専用のユーザー名・パスワード(共通)を設定した為と解されますので、6月から試験的にこれを撤廃し、誰でも自由に掲示板に入れる様にいたしました。

協会の事情で、ホームページのイベント案内などの更新が頻繁に行なえぬ状況下、イベント案内をはじめアルゼンチンにかかる興味ある情報をタイミング逃さず掲示板に載せ、協会・会員間の相互情報交換を行いたく、奮ってご活用をお願いいたします。

広報担当役員

The screenshot shows the homepage of the Argentina Association in Japan. The header includes the association's name in both Japanese and Spanish. Below the header is a navigation menu. The main content area is divided into several sections: a large image of a soccer game, a sidebar with 'Embajada Argentina en Japón' and 'MERCOSUR' logos, and a central section with news and event announcements. At the bottom, there are contact information and a footer with copyright notice.



tina. Todo comenzó cuando en 1984 escuché un álbum de Pat Metheny Group y quedé cautivada por la voz del músico argentino Pedro Aznar. En 1990 visité la Argentina por primera vez y desde entonces he vuelto a ir todos los años. El Rock Nacional no es una imitación del rock europeo o estadounidense. Aznar fue miembro del legendario grupo de Charly García, Serú Girán.

### Bunpei Takinami: pionero del comercio entre Argentina y Japón (p. 12)

por Antonio Takinami

El nieto de Bunpei Takinami (1871-1950) nos relata sobre su ilustre abuelo, un pionero del comercio entre Argentina y Japón. En 1905, Bunpei Takinami llegó a la Argentina y abrió una tienda de artículos japoneses en la calle Florida al 664, en el centro de Buenos Aires: “Casa Togo” en honor al Almirante Togo, protagonista de la Guerra Ruso-Japonesa. “Casa Togo” fue el primer negocio establecido por un japonés en la costa atlántica de Sudamérica.

(イレーネ がしゅう、弁護士・当協会理事)

## ドキュメント アルゼンチン情勢 ～政治・経済の主な出来事～

塩見憲一理事（三菱UFJリサーチ&コンサルティング研究理事）が担当して、アルゼンチンでの発表や統計から、政治・経済の主な動きをピックアップして、半年毎にまとめ別刷りにして作成しております。

最も需要が高いと思われる法人会員には、会報に添付してお送りします。個人正会員、賛助会員の方は、ご希望の旨事務局までにご連絡いただければお送りします。

Eメールでの送付も可能ですので、ご希望の向きはEメールアドレスをご連絡下さい。

このドキュメントは塩見理事の前任者、小林晋一郎理事執筆のころから数年間、途切れることなく続いており、データは協会事務局で保管しております。将来貴重な集積データとなるものと思われま



## 第50回総会・懇親会報告

### (1) 第50回通常総会

当協会の第50回総会は今年もポルスキ駐日大使のご好意で在日アルゼンチン大使館小講堂を使用し去る5月30日(火)土屋会長を議長として開催、総ての議案が滞りなく承認・可決されました。総会当日現在の正会員108名（法人会員28社、個人会員80名）の内31名が出席、他に委任状提出者が41名おり、議決権のある出席者数は72名（出席率66%）でした。



平成17年度活動報告では、土屋会長が昨年6月の訪ア並びに愛知万博期間中に行われたアルゼンチン記念セレモニーの参加を通じて日亜親善の成果をあげたこと、大使公邸で2回の会員懇親パーティを開催したこと、長年に亘り好評であったスペイン語講座がリナ先生の帰国により一旦終了を余儀なくされたこと、ドメック・ガルシア大佐の著になる「日本海海戦から100年」を発刊したこと、会報発行回数は減ったがホームページとも連動させ内容の充実に向けていること等が報告されました。

また平成18年度活動方針では、昨年度に引き続いて会員増による活動基盤の強化とホームページの充実を基本とし、充実したスペイン語講座の再開、タンゴの集いの定期的開催、ア国大使館、埼玉・アルゼンチン友好協会、在亜関係諸団体との協力関係の強化、社団法人化50周年に当たる2007年度記念事業の検討等が決定されました。

決算・予算面では、平成17年度は会費増、事業収入増、経費の削減等により収支が黒字化したこと、及び平成18年度も同様の方針により黒字予算を組んだこと等が計数と共に報告され承認されました。

総会後の懇親会(別掲)への出席を兼ねる会員も多く、来年度総会により多くの会員の出席を期待しています。





なお、総会に先立ち5月15日に本年度第1回理事会が開催され、総会への附議事項(議案)及び会計規則並びに常務理事会規約の制定が承認されました。

## (2) 懇親会

総会に続き、恒例の当協会懇親レセプションがポルスキ駐日大使の御厚意により、元麻布の大使公邸で18:30より約2時間半に亘り開催されました。

参加者は外務省坂場中南米局長以下招待客8人、当協会土屋会長、木島理事長以下役員・会員(含む家族、友人)140人計148人に、ポルスキ大使以下の大使館員家族が加わり過去最高の150人近い大盛況でした。

当日予想された雷雨もその雰囲気に呑まれたのか見事に逸れてくれて、屋外で心地よい風に吹かれ会食を楽しむことも出来ました。

懇親会は、宍戸和郎理事の司会により土屋会長、ポルスキ大使のご挨拶、木島理事長の乾杯音頭に続き、



会田桃子タンゴ・クアルテート(バイオリン会田桃子、バンドネオン鈴木崇明、ピアノ熊田洋、バス東谷健治)が演奏して大いに盛り上がり、参加者は大量のチョリソサンドイッチをはじめエンパナーダ、ワインなどの味と共にアルゼンチン・ムードを楽しみました。

### 平成18年度年会費納入の御願い

月日の経つのは早いもので、本年度(平成18年4月1日から平成19年3月31日まで)も既に3ヶ月が過ぎましたが、同封の郵便振替用紙にて早めにお支払い頂きますようお願い申し上げます。

## 編集長よりの御礼

フロントページの版画は45、46、47号に続き版画大家の星野美智子さんのご厚意により描いていただいた作品を使用させていただきました。

スペイン語のサマリー(Resumen en castellano)は当協会理事のイレーネ賀集さんに作っていただきました。

執筆依頼・原稿入手については、当協会役員以外では渡部千秋氏(三菱商事グループ)と河野 朗子さん(当協会会員)にご協力をいただきました。

末筆ながら、皆様のご厚意に対し厚く御礼申し上げます。

本会報のデザイン、記事の無断転用はお断りします。

### 日本アルゼンチン協会会報 第48号 2006年7月4日発行

発行人 木島 輝夫(当協会理事長)  
編集長 斉木 茂治(当協会常務理事)  
編集発行 社団法人 日本アルゼンチン協会  
105-0004 東京都港区新橋1-17-1  
電話:03-3501-4684  
FAX:03-3595-3932  
E-mail:argentina@nifty.com  
URL:http://www.argentina.jp

印刷 株式会社 イデア・インスティテュート